

## 『春琴抄』の中国語訳にみられる訳注の特徴

### —新聞連載と単行本を比較して

尹永順

(中国電子科技大学)

*Syunkinsyo, one of Tanizaki's masterpieces, has several Chinese versions. However, its translation was rarely mentioned in northeastern China. From 1939 to 1940, Mu Rugai translated the novel into a serial story and published it in Shengjing Times. In 1942, the translated version was published in book form by YiWen Publishing House. Mu's two versions mainly differ in notes. Thus this article analyzes the relation between different types of media and notes by comparing the notes in the two Chinese versions, and aims to discuss the effects of translator's notes on the acceptance of the novel.*

#### 1 はじめに

近年、谷崎潤一郎文学（以下、谷崎文学と略する）の中国語訳を扱った研究、とりわけ1920-30年代を背景とした研究が多数見られるようになった。例えば、解(1997)、銭(2002)、蔡(2008)、張(2010,)張(2007;2014)、金(2013)などは翻訳の視点から谷崎文学を論じているが、これらの先行研究は主に谷崎文学の中国での受容と影響に焦点を当てており、翻訳テキストを扱って翻訳自体に注目した研究はまだ見当たらないと言えよう。その中には、「満州」<sup>1</sup>における谷崎文学の翻訳に触れた研究が1点見られた。金(2013)では、「盛京時報」に連載された『麒麟』と『金と銀』、及び芸文書房から単行本として刊行された『春琴抄』がリストアップされているが、データ作成にとどまっており、それ以上の説明と論述は行われていなかった。このように、「満州」で翻訳された谷崎文学に関する研究は殆ど進んでおらず、更なる研究が期待される分野であると言えよう。

『春琴抄』(1933)は谷崎潤一郎の代表作であり、中国語に翻訳された回数が最も多い日本文学の一つである<sup>2</sup>。しかしながら、『春琴抄』の中国語訳を扱った研究はまだ少ないと言えよう。中国のCNKI(中国知網)と日本のCINIIで検索した結果、関連研究が2点検索された。1点目は、記述的翻訳研究の視点から1942年の穆儒丐訳『春

---

YIN Yongshun, "Observations on the translator's notes in the Chinese translation of Syunkinsyo: A comparative study of newspaper and book," *Interpreting and Translation Studies*, No.15, 2015. Pages 113-126. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

琴抄』と2007年の鄭民欽訳『春琴抄』を比較したものである(尹2009)。もう1点は、『春琴抄』の中国語訳を五種類並べて、日本独特の文化を表現する「三味線」と「雨戸」がどのように翻訳されていたのかを検討した研究(張2010)であるが、「満州」で出版された『春琴抄』は研究対象になっていない。

最初に「満州」で『春琴抄』の中国語訳が掲載されたのは中国語新聞「盛京時報」であった。1939年11月21日から1940年2月1日にかけて文芸欄「神皋雑俎」に全70回に分けて連載された。翻訳者は「神皋雑俎」の編集を担当した穆儒丐である。連載から2年後の1942年に穆儒丐訳『春琴抄』が芸文書房から単行本として発行された。二つの中国語訳は主に翻訳者による訳注の内容に大きな相違点が見られた。

翻訳者の訳注は、翻訳プロセスに不可欠な補償の翻訳方略の一つとして、文学翻訳でよく使われている。訳注は起点テキストに隠れた情報や、起点テキスト独特の情報を読者に伝える、いわば起点テキストと目標テキストの読者との交流を促すような役割を果たす。さらに、原作に対する翻訳者の態度と立場を知るのに役立つパラテキストでもある。

したがって、本稿では翻訳者の訳注に注目しつつ、新聞連載、単行本といった出版媒体の違い、及びそれに伴う想定読者の相違と関連付けて考察し、注釈の相違によって『春琴抄』の翻訳とイメージがどのように変わったのかを検討する。

## 2 「盛京時報」と穆儒丐

この節では、主に「盛京時報」と翻訳者の穆儒丐について紹介する。

### 2.1 「盛京時報」

「盛京時報」は日本人中島真雄が1906年に奉天(現在の瀋陽)で創刊した「満州」初の中国語新聞で、「満州」で発行期間が最も長く、影響力も最も大きい新聞である。「満州」では1905年7月まで日本人が発行した新聞が一つもなかったが、1906年から急激に増え始めた(李,2000)。「盛京時報」のように日本人が発行した新聞は日本の「満洲」進出と密接に関わると考えられる。

「日露戦争直後、日本は新なる重大使命に目醒めて、多難を予想される満州経営に乗り出すに当りて、その一翼を荷う民衆の啓発向上を主とする宣伝工作や、言論機関の緊急必要性を痛感した」(菊池1966)。奉天大会戦<sup>3</sup>に敗北した露軍が潰え去った後、「わが軍が奉天の露軍倉庫を点検したところ、そこから一枚の金看板が出た。それには‘盛京報館’の四大字が刻まれてあった」(菊池,1966)。その看板にちなんで「盛京時報」と名づけられた。日露戦争以降、日本がロシアから受け取った権益の一つであると言えよう。さらに、「満洲ニ於テ清国官民ニ対シ、我政策ヲ普知セシメ、兼テ我勢力ノ暢茂ヲ希画スル為メ清字新聞ヲ我手ニ於テ発刊スル必要アリ」という認識の下で、外務省から補助金を与えられた(李,2000)。1925年11月に外務省と満鉄の出資が87%を占める新たな株式会社盛京時報社が誕生し、「盛京時報」は満鉄の傘下に編入

されるようになった。1936年には「満州国」の勅令により、弘報事業、国論の統制強化を図った満州弘報協会が設置され、「盛京時報」を含む12社を資本金から統制管理し始めた。その後、1944年に「康徳新聞」に統合され、1945年に廃刊となった。

「盛京時報」の創刊者である「中島翁」は日漢新聞紙を通じて、縦横に活躍したばかりでなく、当時民間有志の大家として、隠然たる勢力あり、歴代奉天領事や、満鉄当局のよき相談相手であった」（菊池, 1966）人物で、新聞人としての才能だけではなく、政治的能力も評価されている。中島真雄は「盛京時報」のほかにも影響力のある新聞を幾つか創刊した。1901年に北京で「順天時報」を創刊したが、1905年に外務省に売却し、「満州」へ渡った。1905年には「満州」初の日本語新聞「満洲日報」を営口で創刊した。そのほかに、「蒙文報」（1918）や「大北新報」（1922）も創刊した。

## 2.2 穆儒丐と谷崎文学

「盛京時報」は社説や記事など政治的立場に関わる内容は日本人が主筆を担当したが、文芸欄は主に中国人が担当した。『春琴抄』が連載されたのは文芸欄「神皋雑俎」である。「神皋雑俎」は穆儒丐により「満州」初の文芸欄として、1918年に創設され、小説、紀行文、随筆、伝記などのコラムが設けられて、「満洲」文学の発展に大いに貢献した。「満州」は閉鎖的な地理環境と戦乱などの要因から文学の発展がほかの地域より遅れていて、「10年前、(中略)『満州』には文学らしいものがなかった」<sup>4</sup>（穆, 1942:85）。さらに、文芸誌、単行本に対する統制が厳しかったため、新聞の文芸欄が文学作品を発表する場として大いに活用された。「満洲」の文壇は新聞によって作り上げられたと言っても過言ではない。

穆儒丐（1884－1961）<sup>5</sup>は1916年から1944年にかけて「盛京時報」で文芸欄「神皋雑俎」の編集を務めていた。1905年に官費留学生として早稲田大学に6年間留学するが、この日本留学が小説家を志すきっかけとなった。

「私は文学には門外漢であったが、留学時に余暇を利用して坪内博士訳シェイクスピア全集、新渡戸稲造著ファウスト研究、及び尾崎紅葉、夏目漱石、森鷗外など文豪の作品を多く読んで、文芸の知識を得た」<sup>6</sup>（『盛京時報』1939年2月11日「穆氏談話」）。

穆儒丐は「盛京時報」を中心に、小説、翻訳や劇評などを多数発表し、「満州」文壇で活躍していた。

「20年前、『満州』の新聞や雑誌に小説を発表することは少なかった。外国名著を翻訳することはなおさらだ。穆先生だけが創作と翻訳に取り組み、しかも当時の文言文の風潮の中で素直に白話文で創作して、白話文の先鞭をつけた」<sup>7</sup>（翠, 1944）。

穆儒丐が手がけた翻訳作品のうち、日本人作家は谷崎潤一郎だけである。1924年に『麒麟』と『金と銀』（中国語訳標題『芸妬』）<sup>8</sup>を「盛京時報」に連載し、1939年11月21日から1940年2月1日にかけて『春琴抄』を連載した。『麒麟』が掲載される際、

「訳者誌」で谷崎潤一郎の作品を次のように紹介した。

「日本文学について、中国人は従来関心を寄せることも、翻訳することもなかった。(中略) 明治文学は傑作が多いが、中国に入ったのはごくわずかだ。明治時代は多くの大文豪を輩出したが、中国の学生はほぼ知らない。近頃、日本に寧馨児、つまり谷崎潤一郎がいる。彼の文章と思想はすでに明治文壇を乗り越えている。(中略) 彼は長編小説がないが、短編小説はどれも構成が丹念に練られていて、心理描写も緻密である。取材はいずれも周知の、身の回りのことだが、彼の作品を読むと神秘的な世界に入ったようである。彼はまさに芸術の天才だ」<sup>9</sup> (1924年1月19日「訳者誌」)

と谷崎潤一郎を明治文壇を代表する新鋭作家として高く評価した。

『春琴抄』の中国語訳が掲載される前の、1939年11月12日から11月20日にかけて「小説予告」が出された。

「本書は日本耽美派の純文学作家谷崎潤一郎氏の最新の傑作だ。目の見え  
ない人同士の恋愛史を描いている。谷崎氏の作風には特別な情緒がある。」<sup>10</sup>

連載の最終回(第70回)では、連載時に「訳餘贅語」を補足したのは、読者のさ  
さやかな手助けをするためだったのだから、『春琴抄』を単行本化する機会に恵まれた  
ら、「贅語」を削除して、不可欠な箇所だけを訳注と記したいと語った。連載後、また  
単行本として出版されるということは、おそらく読者に愛読され、それだけの読書の  
需要があったという裏付けであろう。『春琴抄』を単行本化する機会が訪れたのは1942  
年のことである。

### 3 芸文書房

1942年に『谷崎潤一郎集・春琴抄』が現代日本文学選集第四巻として芸文書房から  
出版された。中には、文華(張露薇)訳『猫と庄造と二人のをんな』も収録されてい  
る。

芸文書房は1941年10月に新京(現在の長春)で本屋兼出版社として創設された。  
芸文書房の社長兼営業局長は徐長吉(筆名古丁)<sup>11</sup>、出版局長は趙孟原(筆名小松)、  
図書部長は単更生(筆名外文)である。

「満州文学のホープである古丁、小松、外文等の諸君がみな官や職を辞  
して、新京で本屋を始めた。出版業であり、本を売る店でもある。読書週  
間の10月11日に賑やかに開業した。満系出版界の不振は周知の事実であ  
った。これらの諸君が自ら資本を集め敢えてこの仕事に乗り出したのは、  
無論そのやうな現実を残念だとしての行動なのであろう。相当な職場を辞  
してのこの創業は背水の陣を布く覚悟あってはじめて出来たことであらう、  
その意気や壮とすべしである。(中略) 芸文書房の誕生は新京の文化界に清  
新なものを齎した」(大内, 1941)。

古丁、小松ら主な創刊者は芸文志派と呼ばれ<sup>12</sup>、日本文化人の資金援助を受けて、

文芸誌「明明」と「芸文志」を創刊していた。彼らは、「文芸のための文芸」、「方向のない方向」、「写印主義」（たくさん書いてたくさん印刷）を主張し、不振の満州文壇を賑わせようとした。これまで新聞の文芸欄に大いに依存してきた「満州」文壇を文芸誌や単行本という出版媒体の多様化へと導いたのである。

芸文志派は「満州」における日本の文化勢力と深くかかわっていた。

「満州作家の創作だけでは、われわれはここまで来られなかつただろう。

いろいろな面で日本の諸先輩や友人の厚い援助をもらっていた」<sup>13</sup>

（徐, 1942）。

「満州」文学の発展は日本文化人の援助と切り離せない関係にあったと考えられる。さらに、

「文壇を構築するには、創作だけではその工程を完成することが出来ない。日本文壇を見ると、世界文学の翻訳がどれほど彼らの文学を豊かにしたのかが分かる」<sup>14</sup> (ibid.)

と、日本文壇の成功例から翻訳文学の重要性を認識し、日本文学の翻訳に力を入れていた。そのため、芸文書房は「ほかの満系書店と比較して一つの著しい特徴は、日本の書籍がかなり沢山並んであることだ。それもはっきりした選澤によって選ばれて一々見て行ってうなづける」（大内, 1941）。

1942年度の出版計画を通して、芸文書房がどのような日本文学を翻訳したのかを確認したい。1942年1月8日の「盛京時報」に掲載された「今年満州文芸出版」に芸文書房の1942年度の出版計画が述べられている。

①月刊誌2種類；②現代日本文学選集（計7巻）；③満州文学十年大系；④駱駝文学叢書；⑤現代世界文学選集；⑥少年叢書；⑦学生文庫；⑧人傑叢書；⑨天下事叢書；⑩生活叢書が企画されていた。外国文学から「満州」文学まで、純文学から実用的な書籍まで、さまざまな読者層を満足させるような立派な計画であったと考えられる。現代日本文学選集には杜白雨訳『島崎藤村集・春』、穆儒丐訳『谷崎潤一郎集・春琴抄』、沈堅訳『武者小路実篤集・愛と死』、掌区青刀訳『横光利一集・寝園』、爵青訳『島木健作集・生活の探求』、希文訳『幸田露伴集・幻談、五重塔』と古丁訳『片岡良一集・現代日本文学史略』が予定されていた。この計画により1942年に『春琴抄』が現代日本文学選集第四巻として出版された。

穆儒丐は『谷崎潤一郎集・春琴抄』の訳者あとがきで、

「谷崎潤一郎は現在日本文壇の大御所の一人で、世界に知られる文豪でもある。文芸界で谷崎を知らない人は非常に少ないだろう。彼は、天才・奇才・鬼才を兼ねた人で、『悪魔派』という称号が与えられた。彼の創作はその独自性から他者の追随をゆるさない」<sup>15</sup>（穆, 1942: 85）

と谷崎文学の独自性と悪魔主義的特徴を強調した。

## 4 訳注の比較と分析

この節では主に「盛京時報」の連載と芸文書房の単行本にみられる翻訳者の訳注を比較して、訳注と出版媒体、想定読者との関係、翻訳者の態度と理解が作品の翻訳とイメージにどのような変化をもたらしたのかを検証する。

新聞連載時と単行本は本文には大きな変化が見られなかった。句読点の付け方が少し異なったり、新聞連載時に括弧付きで補足された主語が、単行本では削除された程度の相違点しか見当たらなかった。最も大きな変化が見られたのは訳注の数と内容である。連載時は「訳餘贅語」という表現を使っていたが、単行本の際はそれが削除されていた。穆儒丐は中国の読者が『春琴抄』の中国語訳を読む際に必要だとされる情報提供を訳注と言ひ、それ以外の翻訳者の感想や知見のような主観的な「大したものではなく、読者のささやかな手助けとなる」<sup>16</sup> (第70回) ような内容を「訳餘贅語」と考えているようである。

新聞連載時と単行本の訳注を以下のように並べる。紙面の関係で、客観的な情報提供は語彙やキーワードのみを提示する(例: 鴟モズ、検校など)。語彙や固有名詞に対する情報補償ではなく、翻訳者の感想や知見などが述べられた場合は、「～について」の形で提示し、後ほど詳しく述べる。「鴟モズ」、「鳴シギ」、「シロウド」、「クロウド」、「ユダンボ」などは原文の表記どおりに提示する。

「盛京時報」の連載 (1939-1940)	芸文書房の単行本 (1942)
鴟モズ 第3回	鴟モズ p 10
検校 第3回	検校 p 10
日蓮宗 第3回	日蓮宗 p 10
『春琴抄』の文体について 第3回	
谷崎潤一郎について 第3回	
文政 第6回	文政 p 13
慶応 第6回	慶応 p 13
佐藤春夫 第6回	佐藤春夫 p 13
春琴伝と春琴の写真 第6回	春琴伝と春琴の写真 p 13
『春琴抄』の物語の提示方法について 第6回	
生田流 第8回	生田流 p16
鳴シギ 第8回	鳴シギ p16
勾當 第8回	勾當 p16
師匠 第8回	師匠 p16
箏 第8回	箏 p16
玄人クロウド 第10回	玄人クロウド p17

素人シロウド 第10回	素人シロウド p17
「こいさん」、「糸さん」について 第10回	
直訳と意識について 第10回	
『春琴抄』の物語の提示方法について 第13回	
中国語と日本語について 第13回	
第六感 第14回	第六感 p23
押入オシイレ 第18回	押入オシイレ p 26
撥 第18回	撥 p 26
日本の家屋について 第18回	
寒稽古 第21回	寒稽古 p 30
狸之腹鼓 第21回	狸之腹鼓 p 30
雨戸 第21回	雨戸 p 30
師道について 第23回	
撥 第23回	撥 p32
	浄瑠璃 p35
	人形使 p35
三味線の音の翻訳について 第28回	三味線の音の翻訳について p38
恋愛と家庭教育について 第28回	
前回の内容について 第32回	
弘化 第33回	弘化 p44
炬燵コタツ 第38回	炬燵コタツ p50
ユダンボ 第38回	
迦陵迦嚩 第41回	迦陵迦嚩 p53
鳥の飼育について 第41回	
鶯 第42回	
文学について 第42回	
盆暮 第45回	盆暮 p58
駕籠 第45回	駕籠 p58
次回の内容予告について 第47回	
第42回の「鶯」の訂正について 第47回	
太棹 第47回	太棹 p60
春琴の1回目の災難について 第54回	

春琴の災難に対する翻訳者の感想について 第54回	
悪七兵衛景清 第61回	悪七兵衛景清 P75
壽永 第61回	壽永 p 75
谷崎潤一郎、翻訳について 第70回	訳者あとがき P80

以上のように、「盛京時報」の連載を踏まえて芸文書房の単行本が刊行される際、穆儒丐が新聞連載の第70回で指摘したように、「贅語」が削除され、訳注だけが残された。訳注として再利用されたのは年号、楽器、人名、日本漢語、職業、風習など日本独特の文化を反映した語彙である。連載時になくて単行本に補足された「浄瑠璃」と「人形使」も日本独特の文化を代表する語彙である。

連載にはあったが、単行本出版の際に消えた「贅語」には以下のような内容が含まれている。

1) 谷崎潤一郎と『春琴抄』の紹介 (第3回)。

谷崎潤一郎と代表作、及び『春琴抄』の文体上の特徴が紹介された。

2) 『春琴抄』の物語の提示方法と連載時の提示方法 (第3、13、32、47、54回)。

『春琴抄』は「私」が春琴の墓参りをするのをきっかけに、佐助著とされる『春琴伝』を踏まえて春琴の一生を知るという倒置法で述べられている。読者によりの確に物語を伝えるために、『春琴抄』の倒置法という物語の提示方法を説明した。連載時は、前回の内容を再現したり、次回の内容を予告して、物語の連続性と完全性を保とうとした。例えば、「前回は昔に遡った倒置法である。今回から本論に入る」や、「春琴が天才であることは冒頭から語られてきたが、実際どれだけ才能があるかは証明しようがなかった。本章に登場する二人の芸人がその証人になりうるので、構成上不可欠の一章である」(第13回)のような説明が数箇所見られた。ほかに、春琴が2回目の災難に遭われた時、1回目の災難について補足された。1回目の災難は第6回、2回目の災難は第54回に現れたように、2回にわたる災難は連載時かなり離れていた。補足により、読者の記憶を甦らせ、全体的な内容と印象を深めることができた。翻訳者は常に連載という特殊な形態を考えて、読者にできるだけ完全な物語を再現しようと工夫していたことが読み取れる。このような提示方法の補足は連載ならではのやり方だと考えられる。

3) 翻訳についての翻訳者の知見 (第10、13、18、70回)。

『春琴抄』を翻訳する際に思い至った翻訳の知見や感想が述べられている。まず、直訳と意識について、逐次に翻訳する直訳は原作の精神を伝えることが困難であり、原文から離れすぎた翻訳は、翻案になってしまうので、翻訳は至難の業であると指摘した。原文から離れず、かつ流暢に自国の言語のように翻訳する、つまり直訳と意識を巧みに使いこなせるのが好ましいと主張した(第10回)。第13回では、中国語と日本語は構文上の違いにより、日本語で文勢のある文章が、中国語に翻訳されると物足

りないような気がするので、翻訳する際に補填を行うべきだと翻訳者は主張した。ほかにも、「太棹」、「押入」や鶯の鳴き声などの翻訳についての心境が述べられた。

4) 翻訳者の経験や嗜好 (第 18、23、41 回)。

「押入」が登場する場面で、日本屋敷の幽玄、清潔な特徴を紹介し、鶯の飼育が現れる場面では、北京での鳥の飼育について説明した。翻訳者自身の生活と経験を読者と分かち合った。

5) 翻訳者の感想と説教 (第 10、23、28、42、54 回)。

春琴が師匠春松検校にならって佐助に厳しい稽古を行う場面で、翻訳者は次のように述べた。

「どんな些細な技でも、師匠から教えを受けたら、その師恩を忘れずに、一生感謝し、尊敬すべきだ。(中略)日本人の師匠に対する尊敬とひたむきな勉学には比べようがない」<sup>17</sup> (第 23 回)。

この場面は、厳しすぎる稽古を行う春琴と、それに耐え切れず泣く佐助との関係に注目が集まりそうな箇所であるが、翻訳者はむしろ「師道」に目を向け、春琴の稽古のやり方、佐助の春琴への態度を高く評価したかのように思われる。

サディズム的傾向のある春琴の稽古で佐助が苦勞する場面では、翻訳者は谷崎潤一郎の悪魔派の見せどころだと認めながらも、次のような説教めいた感想を述べている。

「愛情の魔力が至る所に入りこむことは既に知られている。そのため、恋愛を求めるのは自ら地獄に落ちると同じだ。娘の異様な情欲に両親の正論が入るのは、いわばしつけというものである。人の運命はその天性によるものではあるが、しつけがなっていない人が最も悲惨だ」<sup>18</sup> (第 28 回)。

翻訳者は春琴の佐助へのサディスティックな行動から焦点をずらし、両親の正論に読者の視線をひきつけ、誤った道に陥りそうな若いカップルを助ける両親の教育を大きく取り上げ、家庭の「しつけ」の重要性を強調した。

春琴のわがままな性格と過酷な稽古で災いを招いた場面についても、感想が付けられた。

「多才多藝は幸せではあるが、才能があるからといって自分勝手に振舞ったり、謙虚を知らずに威張ると、幸せになれないどころか、却って禍を招いてしまう。(中略)世の中には控えめに行動したいのに、それが叶わない人もいる。文章を書く者だ。書かないと職を失い、書くと妬みを招くので、困惑している。この世の不幸だろう。名に恥じないことを願うだけだ」<sup>19</sup> (第 54 回)。

翻訳者は、春琴の 2 回目の災いを通してどんな才能の持ち主でも威張ってはいけないという教を説いた。さらに、自分の境遇と照らし合わせて、文章を書く人の苦悶を打ち明けた。

それ以外に、創作に関する知見も述べられた。文学は真、善、美が文章に反映したものであるが、「満州」の学生たちはやたらに人の作品を剽窃、模倣するだけであると、

「満州」の若者の創作の態度を批判し、「満州」文学の発展を懸念していた(第42回)。

このように、「盛京時報」の連載を芸文書房で単行本化した際には、訳注の数と内容が減り、主に翻訳者の経験、感想、知見など主観的な考えを述べた箇所は削除された。

新聞連載に「贅語」が多く書かれたのは、新聞は様々なジャンルの文章が掲載される娯楽性と通俗性が強い媒体であり、主観的な考えを気軽に述べられる環境にあったからだと考えられる。そして、長年「盛京時報」で文芸欄「神皋雜俎」の編集者を務めた穆儒丐の「盛京時報」、乃至「満州」文壇におけるステータスとも関わると言えよう。穆儒丐は「満州」文壇を支えてきた一人として、大きな影響力を持ち、指導的な立場にあったと考えられる。そして、連続性にかけて新聞連載の特徴も「贅語」が増えた一因である。文芸欄の読者は文学愛好者だけではなく、記事やほかのジャンルを読もうとする幅広い読者層であると推測できる。

それに比べて、1942年の単行本は「盛京時報」の連載時の内容を試行錯誤した結果であるといえよう。毎日のように追われる新聞の連載と異なって、単行本には、まず「下敷き」があって、またそれを清書するような余裕もあったと考えられる。そういう意味でも、単行本は連載より、内容的に完全性と正確さが確保されるといえよう。それに、わざわざ単行本を購入して読む人はおそらく文学愛好者、或いは小説家志望者ではないかと考えられる。このような読者にとっては、翻訳者の主観的な考えや説教のような「ささやかな手助け」は必要ではなかっただろう。こうした想定読者からも「贅語」から訳注に変わった理由が窺える。

このような「贅語」と訳注は作品の理解とイメージにどのような変化をもたらしたのであろうか。春琴の佐助に対するサディスティックな行為に対する翻訳者の態度を見ると、二人の歪んだ恋をネガティブに評価した反面、両親の正論についてはポジティブに評価している。これは、小説予告の「恋愛史」の位置づけと相まっており、翻訳者は『春琴抄』の悪魔主義的特徴を薄めて、普通の「恋愛小説」であることを読者にほのめかしているのではないかと考えずにはいられない。それに比べて、芸文書房の単行本は主に日本独特の語彙や表現に訳注を付け加え、読者の嗜好と理解を左右するような解釈は一切行われていないため、翻訳者の解釈に左右されることなく、自分なりに『春琴抄』の世界を作り上げることができよう。

## 5 おわりに

「盛京時報」の連載と芸文書房の単行本を比較すると、本文には大した相違点が見られなかったが、訳注の内容に大きな変化が見られた。翻訳者の訳注はパラテキストとして本文ほど注目されることがないが、実を言うと、様々な情報が含まれているため、特に翻訳者の態度と理解を知り、原作に関する示唆を得る上で重要な手がかりになると考えられる。

二つの中国語訳は連載と単行本という媒体自体の特徴によって、訳注のつけ方に

相違点が見られたほかに、それぞれの想定読者が異なっていると推測できよう。文芸欄は様々な形態の作品が掲載され、娯楽性と通俗性が強く、様々な読者層の需要を満足させるような媒体である。毎日発行される新聞は印刷と流通が単行本より速やかである利点を持っている反面、内容の連続性に欠けているという欠点もある。穆儒丐はそうした新聞の欠点を補うために、提示方法で工夫を凝らした。

その一方で、古丁ら芸文志派が芸術のための芸術を主張するように、芸文書房も文学性の強い作品を多数出版した。単行本を購入する想定読者は文学愛好者や小説家志望者であろうから、谷崎文学の特質をありのままに述べ、作品の文学性を強調して、日本文化を知る最低限の情報と知識だけを補足するとしても、読者には十分納得してもらえたと考えられる。したがって、同一翻訳者による翻訳でも訳注のつけ方が変わることがある。

さらに、訳注の内容によって、読者に与えた作品のイメージも変わったといえよう。「盛京時報」では『春琴抄』は「盲人同士の恋愛史」であるため、「愛の魔力に入りこまない」ように呼びかけたり、不健全な恋愛をやめさせる両親の人物像を作り上げ、谷崎潤一郎の悪魔主義的雰囲気をも薄めようとした。その一方で、単行本は日本文化を知るキーワードの解釈以外は提示されていないため、読者の解釈を左右することもなく、読者なりの読み方が可能であったと考えられる。

## 【注】

- <sup>1</sup> 特定の歴史における単なる地理的な概念、つまり「東北地方」に相当する用語として用いる。「満州国」は中国語の「偽満州国」に当たる。
- <sup>2</sup> 『春琴抄』の中国語訳には、陸少懿 1936、于雷 1983、張進 1984、呉樹文 1991、鄭民欽 2007 などがある。
- <sup>3</sup> 1905年2月20日から3月10日にかけて「満州」の奉天をめぐる行なわれた日露戦争最後の会戦であり、日本軍の勝利で終わった。
- <sup>4</sup> 中国語原文：「在十年前，……不過那時滿洲還沒有文學。」以下、中国語原文の日本語訳は筆者による。
- <sup>5</sup> 穆儒丐は1884年に北京で満州旗人として生まれ、1905年に官費留学生として日本に留学し、帰国後、短期間軍官の秘書、教師、「国華報」の編集者を務めた。1916年に瀋陽に渡って、「盛京時報」の文芸欄「神皋雜俎」の編集者となった。本名は穆都哩であるが、儒丐、丐というペンネームを使って、文壇で活躍した。1939年には歴史小説『福昭創業記』で「満洲国」の第三回文芸盛京賞と第一回「民生部大臣賞」を受賞した。「満州国」崩壊後の活動については、寧裕之に名前を変えて、1953年に北京市文史研究館館員になったとしか知られていない。
- <sup>6</sup> 中国語原文：「鄙人於文學原屬門外漢、不過在留學時代課餘之假、常常涉獵坪内博士譯之莎士比亞全集、新渡戸博所著之浮士德研究以及尾崎紅葉夏目漱石、森鷗外諸

大家之作，於文藝上獲得不少之知識。」

- 7 中国語原文：「二十年前，在滿洲的各種報紙雜誌上，少見有人創作過小說，尤其是少見有人翻譯過外國名著，只有穆先生能創作，能翻譯，更能在彼時純文言勢力之下，率直的以白話文來寫作，而開語體文的風氣之先。」
- 8 「訳者誌」には『刺青』の翻訳も予告されていたが、実際には翻訳されていない。「満州」では本研究で扱う「盛京時報」と芸文書房以外に、1939年には春谷訳『麒麟』が中国語新聞「大同報」に連載されている。
- 9 中国語原文：「日本の文學，中國人向來沒有注意的，也沒有翻譯的，……明治時代他的作品，很有些傑構，不還流入中國的很少，明治時代，日本出了許多大文豪，中國學生，差不多都不知道，最近的作家，日本現有一個寧馨兒，便是谷崎潤一郎，他的文學和思想，把明治文壇已然突破了，……他雖然沒有極大地長篇，只就短篇而論，沒有一篇不是精心結撰，心理的描寫，真乃無微不至，他的取材，都是人人所知眼前之事，不還經他一描寫，便超入空靈之域，他真是藝術的天才。」
- 10 中国語原文：「本書是日本唯美派純文芸作家谷崎潤一郎氏較比還是今年的一篇傑作。乃是描寫兩個盲人的戀愛史。谷崎氏的作風，別有神境。」
- 11 日本語が堪能で、「満洲国」國務院法制局統計処に勤務し、のちほど満州文芸家協会に入会した。
- 12 1937年3月に「月刊満州社」の日本人社長城島舟礼の資金援助を受けて、文芸誌「明明」を創刊したが、1938年9月に経済的原因で停刊した。1939年の秋、古丁と同人らは芸文志事務会を立ち上げ、また城島舟礼の資金援助を受けて純文芸誌「芸文志」を発行した。
- 13 中国語原文：「我們之所以有今日，單純依靠滿洲作家自己的創作是難以實現，重要的是我們在很多地方依賴了日本歌先輩和朋友們的熱情援助。」
- 14 中国語原文：「欲建築文壇，只會創作還是不能完全其工程的。即看日本文壇，我們可知世界文學的翻譯是怎樣豐富了他們的內容。」
- 15 中国語原文：「作者谷崎潤一郎，是現在日本文壇一大重鎮，同時也是世界的一大文豪；文藝界不知道穀崎的，大概很少吧。他是天才，奇才，鬼才兼備的人，所以總給他加上惡魔派的徽號，他的創作，絕不許人追隨。」
- 16 中国語原文：「沒有多大意思，只不過為幫讀者一個小忙。」
- 17 中国語原文：「雖一技之微，苟有師傳，得其教益，則畢生感戴，不忘師恩，……以視日本人之恪遵師長，誠心學藝，洵不能同日語也。」
- 18 中国語原文：「愛之魔力之無所不至，亦揭示無遺，故青年男女之追逐情癡，實無異自趨地獄。於小兒女，異樣情欲中，忽插入春琴父母一段正論，此即所謂家教也，人之歸宿，雖各依其天性，然以不聞家教者為最慘痛。」
- 19 中国語原文：「多才多藝，是人生一種幸福，然而若因才藝而嬌矜自滿，任情而為，不知謙退，則又不見為幸福，反足因為得禍，……然而天下事，有雖欲自斂，而不可

得者，以文糊口者是也，不作則失業，作則又未免招嫉，欲罷不能，真天下之至不幸也，雖然但求無愧於心而已。」

.....  
【付記】

本論文は2013年度日本住友財団「アジア諸国における日本関連研究助成」「『満州』(1906-1945)における谷崎文学—中国語新聞『盛京時報』と『大同報』を中心に」(助成番号138033)、及び電子科技大学2015年度中央高校基本科研業務費助成「東北淪陥時期日本文学訳介研究」(助成番号ZYGX2014J127)による研究成果の一部である。

.....  
【筆者紹介】

尹永順(YIN Yongshun)中国電子科技大学日本語学部准教授。神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程修了。中国における谷崎文学の翻訳と受容に関する研究に従事。主な論文は「『細雪』の中国語訳における人物像のリライトについて—翻訳者の序を踏まえて—」(『通訳翻訳研究』第12号)ほか。連絡先は [yineijun@hotmail.com](mailto:yineijun@hotmail.com)

.....  
【参考文献】

- 蔡榕滨(2008)「谷崎潤一郎在中国的訳介」福建師範大学修士論文(未刊行)
- 翠羽(1944)「穆儒丐先生」『芸文志』 一卷六號 芸文書房
- 蔣蕾(2008)「精神抵抗：東北淪陥区報紙文学副刊的政治身分与文化身分—以『大同報』為樣本的歷史考察」 吉林大学博士論文(未刊行)
- 解志熙(1997)『美的偏至—中国唯美—頹廢主義文学思潮研究』上海文艺出版社
- 金晶(2013)「谷崎潤一郎文学在民国时期的接受情况研究」南开大学出版社
- 菊池貞二(1966)菊池傲霜庵隨筆『秋風三千里 中国四十年の回顧』 南北社
- 李相哲(2000)『満洲における日本人経営新聞の歴史』 凱風社
- 穆儒丐(1942)「訳後語」『谷崎潤一郎集・春琴抄』芸文書房
- 村田裕子(1989)「一満洲文人の軌跡—穆儒丐と『盛京時報』」文芸欄『東方学報』第61冊 東京大学人文科学研究所
- 中下正治(1996)『新聞にみる中日関係史 中国の日本人経営紙』 研文出版社
- 岡村敬二(2012)『満洲出版史』 吉川弘文館
- 大内隆雄(矢間)(1941)「芸文書房のこと」『満洲評論』第21巻16号、満洲評論社
- 銭曉波(2002)「中国における日本耽美主義文学研究の諸問題—谷崎をその中心として」『言語と交流』第5巻 言語と交流研究会
- 王璐(2008)「‘盛京時報’研究—1906至1931年有關文学和歷史的研究」東北師範大学修士論文(未刊行)

- 王 璐 (2012) 「谷崎潤一郎与中国」 吉林大学博士論文 (未刊行)
- 徐長吉 (古丁) (1942) 「林房雄・古丁対談」『艺文志』4月 芸文書房
- 許文暢 (2011) 「偽満洲時期文学与政治的遊移—以 1931-1937 年『盛京時報』副刊‘神  
皋雜俎’為中心」 東北師範大学修士論文 (未刊行)
- 尹永順 (2009) 「『春琴抄』の二つの中国語訳に見られる翻訳方略と規範について--記  
述的翻訳研究のケース・スタディーとして」『日本通訳翻訳研究』第9号
- 張二菊 (2010) 「20 世纪二三十年代谷崎潤一郎在中国」 福建師範大学修士論文 (未刊  
行)
- 張美茹 (2010) 「淺談文化詞語的翻譯：以『春琴抄』的訳本為例」『青年文学家』  
第17期
- 張能泉 (2008) 「中国現代文壇对谷崎潤一郎的翻譯与接受」『外国文学研究』第5期
- 張能泉 (2014) 「谷崎潤一郎国内訳介与研究評述」『日語學習与研究』第2期